

# 私の戦争体験

第12集

このものの明るい未来のために語り継ぎます



いづみ

特集号

1990年8月

COOP  
いづみ市民生協

# 私の戦争体験

おみ

## 白い衿のワンピース

おみ

八尾中央支部

高田百合子

その日は敗戦となつた八月十五日に近い、或る夏の暑い陽ざしの屋でした。

工場へ行かなかつた義兄や兄が居たので、たぶん日曜日だったのでしょうか。当時縁故疎開生で小五だった私は、姉の住む兵庫県明石に近い社宅で警戒警報を聞き、続いて空襲警報が鳴つたのを覚えてます。

「おかしいな。何の音もせんし（飛行機の爆音）間違いやろか」

「そんなことないやろ」

姉夫婦の会話です。生まれて間もない赤ん坊（甥）をかかえて心配だったのでしょうか。社宅の端からゆるい坂を登つて小高い丘があり、登りつめたところを横へ入つた山あいに

防空壕が作つてありました。空襲が激しくなり、夜でもラジオを聞き乍ら寝たものです。

空襲警報が鳴ると決つて家族全員で山の防空壕へ避難しました。

その日はどうした事が女子供だけで、姉と私、赤ん坊と三人で防空壕へ行くことになりました。

「早う今のうちに行けや」と義兄のせきたてる声を後に家を出ました。

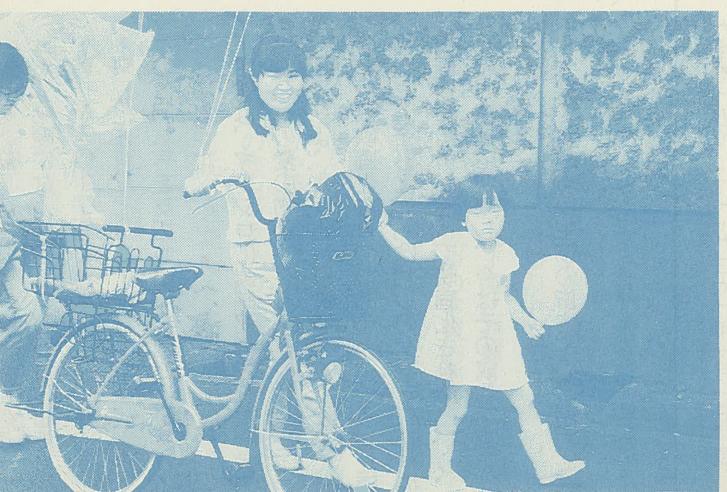
姉が赤ん坊を背負い、私が乳母車に鍋（雑炊が入っている）をつるして押しながら、巾広い坂道にかかりました。坂の長さは一五〇メートル位、巾は十メートル程だったでしょうが、白っぽい道筋だけできえぎるもののは何もありません。

その頃殆どの日本人が栄養失調にかかり、私も例外なく暑さと両方でしんどかったのを記憶しています。姉の前に一人の男の人が登つて行くのが目に入りました。道は三人が間隔を於いて登つて行く恰好になりました。私はのろのろと足どりでやや遅れながらでした。先頭が坂道の三分の二、殿の私が三分の

一で、真中に姉がいます。

その時です。

突然飛行機の爆音が続いて、艦載機一機（私



おみ

## 私達家族の戦中戦後

おみ　おみ　おみ

泉北ひのお支部

高橋 佑子

どれ位時間が過ぎたのでしょうか。何分か、いや何秒か、あまりの静けさにこわごわ顔を上げ、空へ目をやると飛行機が方向転換して去つてゆくではありませんか。

助かった!! 体中の力が抜けていくのがわからりました。男の人はバツの悪そうな顔をして立ち去り、私達は家へ帰りました。

「あんさんが行けと言わはったから行きましたんや、こんな怖い目にあうなんて」

姉の泣き言に義兄は「大丈夫と思ったんやけどなあ」と小さくつぶやいて言葉もありませんでした。

その日以来、姉は自分で判断し、行動し、考える強い人になつたのです。

私のワンピースですか？ 捨てたのか、或は大切にしまつておいたのか記憶にないのでですが、しかしその服のチリメンのような感触だけは、四十五年経つた今でもはっきりと私の中に刻み込まれています。

突然顔面蒼白となつた姉は、だまつたまま私をみて服の衿をひっぱり「百合子、なんで白いものを着ているんや、敵にみつかるやないか」とおこり出しました。その頃白色は空から発見されやすいと言われていたのです。

そのワンピースは大連に住む従姉妹からのプレゼントで、私の大のお気に入りでした。

淡い灰色でこまかい赤味を帯びた花柄が全体に散りばめてあり、衿はショールカラーの小さな、そしてなるほど白色でした。

悲しくなつた私に恐怖が走りました。二、三日前、機銃掃射の音を頭上にきき、そのバリバリという機関銃の不気味な音に思わず耳を押えて押入れの中へ逃げ込んだのを思い出しました。

坂本町六一（長崎）

爆心地より南東へ〇・九キロメートル

爆風で片足が倒れたそのままの姿で、四十五

年間立ち続けています。

おみ

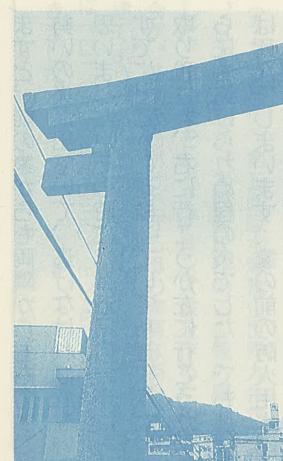
## 片足鳥居

坂本町六一（長崎）

爆心地より南東へ〇・九キロメートル

爆風で片足が倒れたそのままの姿で、四十五

年間立ち続けています。



島原めぐり



嵐の中の母子像

原爆資料館前（広島）

崎り  
長ぐ  
め  
島  
広  
原

昭和三十四年（一九五九年）、第五回原水爆禁止世界大会が広島で開かれたとき、日本原水協が、本郷新氏作のこの像の原型を広島市に寄贈しました。この像をもとにブロンズ像を作るため、広島市婦人会連合会が、子供を命がけで守る母の崇高な姿を、私たちの手で、ぜひ建てようと立ち上がりました。私たち、募金は一口二〇円（現在の三〇〇円ぐらい）を集めて、建てることができました。

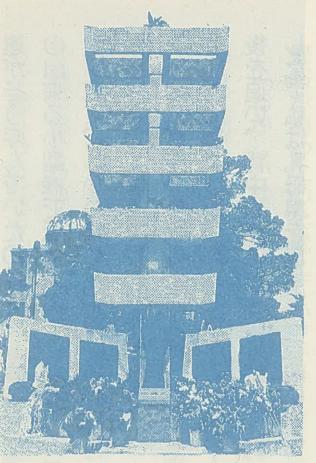
態で、二階に寝ていたのです。母はどうしよう、どうしようと泣きました。でも母は妹を背負っていましたし、私や妹の力では祖母を二階から降ろし連れて逃げる事は出来ませんでした。ぐずぐずしていたら、全員焼死していましたと思うのです。夜がしらじらと明ける頃やっとB29が飛び去り、少し息苦しさから解放され、助かったのだと思いました。でも眼は痛く焼けた臭いの中を家の方に向って歩き始めました。難波の近く迄きていたのです。見わたす限りの焼野原でした。我が家はどうなっているだろう。父は祖母はどうしただろうと思いつら、入れなかつたガード迄来て呆然と立ちすくみました。真っ黒に焼けた人達、顔も着いていた服もわからなくなつた人達が大勢坐つたままの姿でいるのです、母も妹も私もただただ恐くて足がすくみました。だって何時間か前に入ろうと思っていた処なのです

もの、言葉も出ませんでした。そして又次の処も、次の処も、いくつものガード下で何百人の人達が死んだのでしょうか。詳細はわかりませんが私達の小学校の方達の中にも何人か焼死された方がおられた様でした。

やっと我が家前に辿りつきました。母も私も泣きました。涙が出て止まりませんでした。気が付いたら何んにも持たずに手ぶらで出でました。防火訓練の時には火を消す事、大切な物はいつも身につけていた事と分つてい乍ら何んの役にも立たない、そんな生やさしい状態ではなかつたのです。二階に父の大切な本が、本棚にたくさん並んでいてその厚みのある本だけが少しくすぐつていました。家もなくお金もなく食べる物もなく、私は「明日から学校をやめて働きにゆく」と母にいました。父が探しに来てくれました。そして祖母を助けてくれた事をきかされ、ほ

つと致しました。近所の人達は旧今宮中学校（現在今宮高校）にみんな避難していました。もっと早く避難していればこわい思いもせずにすんだのにと思いました。でもその今宮中学校の正門の前の十六号線に面して防空壕が両側にありました。あんなに道幅が広いのに壕に入られた方殆んどが焼死されました。小さい子供をかばつている様な姿のまま亡くなつておられた母親の事は今でも脳裏から離れません。そして国道を渡つた前の一番端の防空壕で果物屋さんだった同級生の友達も亡くなつた事を後で知りました。

とにかく防空壕が浅かったです。何んの役にもたたず、それ処が却つて焼死させる場所となつてしまつたのです。学校へつきました。それでも大変でした。裸体のままの赤ちゃんがころがしてありました。又別の場所にも小さな子供が置かれていました。母親はどうしたのでしょうか…。医者もいない時代でしたので大変なのです。怪我をした人もたくさん居られた様ですが、兵隊さん達が見ていた様です。とりあえず私達家族は母の姉（伯母）が西成区の玉出におりましたので、そちらにしばらくお世話になりました。でもいつまでも居られず、父の勤務していた病院（今宮中学校の南側にありまして焼けずに助かったのです）

崎り  
長ぐ  
め  
島  
広  
原

## 動員学徒慰靈碑

平和記念公園内（広島）

第二次世界大戦中、動員されて亡くなつた学徒の靈を慰めるため建てられたものです。この塔のうしろにある台座には、当時、動員された学徒が働いていた姿が描かれています。

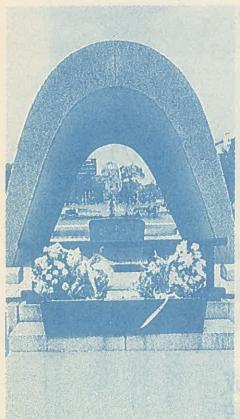


がありません。私の友達に農家の方がいて栗や大豆を分けて頂き時々持つてやりました。親元を離れて生活している子供達、淋しさのあまり度々線路づたいに脱走したのです。上の弟もその中の一人でした。下の弟は早生まれのためもっと食事も少なかったのですが、じつどがまんの子でした。

翌二十年の三月十二日、妹は小学校の卒業式のため帰ってきました。そして三月十三日卒業式の前夜警戒警報発令、続いて空襲警報。その頃は度々警報が出ていたのでそんなにあわてもせざ家の畠の下の防空壕に三才の妹を背負つた母と私と妹と入つてきました。父は乳児院の薬剤師をしておりましたのでそちらの方へ様子を見に出かけてしまいました。どれ位だったか飛行機の飛ぶ音が低くなり何か落とした音がしたので壕から飛び出ました。裏庭に焼夷弾が落ちていたのです。母は水をかけて消していました。私が表の方に出てみ

ますと、前の家からも両隣からもものすごい勢いの炎が出ていて、逃げなければ危ないと思いました。その時には御近所の方達はもうすでにどこかに避難していく私達家族だけが取り残され、右に行こうか左に行こうかどちらにも逃げられぬ程の炎でした。でも逃げねば死んでしまいます。家の前の防火用水に庭を浸しそれを頭からかぶりやつとの思いで市電の通りに出る事が出来ました。そして南海電車のガード下に避難しようと走り続けました。でもどのガード下もすでに一杯の人でとても入れてもらえませんでした。あちらこちら走り続ける間も焼夷弾はバラバラと落ちて来て街中火の海、眼は痛く息苦しくどのくらい走り続けたでしょう。やっと少し幅の広いガード下に入る事が出来てほっとしましたが、B29が飛び交い焼夷弾は雨の様に降り、ガードの両側から炎が入つて来て皆んな真ん中に寄りました。息苦しく熱くてもう駄目で

はないか、死んでしまうのではないかと何度も思いました。それに大変な忘れ物をしてしまったのです。祖母なのです。母方の祖母が岐阜に疎開するからと二、三日滞在していたのです。しかも足を痛め一人では歩けない状



崎り  
長ぐ  
島  
原  
原爆慰靈碑

平和公園内（広島）

丹下健三氏の設計で、一九六二年（昭和三十七年）に完成しました。

「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」という碑文があり、この文の主語が誰なのかをめぐつて論争もおこりました。



島  
原  
原爆慰靈碑

### 原爆犠牲国民学校教師と 子どもの碑

平和公園内（広島）

昭和四十五年（一九七五年）完成。広島県被爆教師の会の提案で、広島県の教師、児童、生徒、父母の募金でつくられました。裏面には、八月六日、八時十五分に登校してきた子供たちがピカピカにやられて、骨だけになってしまった状況が詩われています。

太き骨は先生ならむそのそばに

小さきあたまの骨あつまれり『歌・正田篠枝』

も戦災の傷跡は深く、焼けた臭いは何ヶ月も残り、電気のない暗闇な夜も何ヶ月も続きました。それに一番大切な水道も駄目になってしまい、水道管の破裂している場所迄お水をくみにゆかねばなりませんでした。そんな時近くで井戸水が出る処が出来て、その水で家事万端（汚染されているとも知らず）に使用していました。その為三才の妹は腸をこわし脱水状態で医者にもかかれず死んでしまいました。その妹は生れた時から弱くていつも泣いてばかりいました。栄養も取れずお菓子と名のつくものは何一つ食べる事なく、三才になつても歩く事も出来ないまま死んでしまいました。いつも私が学校から帰ってくると歩行器にのつたまま笑顔で私を迎えてくれていたのです。天使の様なその笑顔、一枚の写真となつて心に灼きついています。この妹も

戦争の犠牲者なのです。お葬式も出来ず小さなみかん箱に叔父が自転車で阿倍野の焼場迄運んでゆきました。

二年生の間はまだ勉強は半分以上出来ました。後は山をきり開いて、畠にしたり田んぼにして、芋を作り稻を植えて農家の方々のきびしさを知り、食糧難の一端を手助けしていました。六年生になってからは国鉄吹田駅の操車場で電車のベンキ塗りをしました。工場にいる人と言えば、私達と同じ年令位の子供の工員さんしからず、大人達はみんな戦争についてしまっていたのです。六月に入つて二度目の空襲だったと思います。操車場にも防空壕の鐵板の上を機関銃のうつ激しい音がして恐い思いを致しました。梅田あたりがすっかり焼けてしまつた時だったと思います。そのため



へ下る事も出来なくて身体中があふえ坐りこんでしまいました。でも後からぞくぞく学友がきていました。私が進まなければみんな帰れないのです。又勇気をふるい起し、渡りきりました。今でもJR線にのり淀川の鉄橋を通るたび、あの日の事が思い出されます。

八月十五日工場も盆休みで家に居りました。戦争に負けたという事が本当に信じられなかった。これから日本は、私達国民はどうなつてゆくのだろうかと不安の中、いろんなデマが飛び交いました。

やがて弟達も疎開先より帰つてこられる様

になり、私達一家は弟妹の恵美第三小学校の焼け残った鉄筋三階建ての元図画室、理科室がベニヤ板で仕切られ、市営住宅になつた処に引越しました。そこで戦後の苦しい時代を迎える事になりました。父は五十才で市の病院を首になり、わずかな退職金で一家六人の生活を支えていかなければならず途方にくれた事と思うのです。先ず父母が小学校の校庭を耕し、色々な野菜を作り、私達子供も学校

から帰つてると水やりを手伝いました。処がやつと食べられる様な状態になると盗まれるのです。当時は本当に皇紀棒が横行しててどんなに父や母がくやしい思いをした事でしょう。それ位食べる物がなく、毎日雑炊か、さつまいもかでした。白い御飯や卵、肉、魚、戦争中と戦後もどんな処で食べられていたのか、私達には手の届かない存在でした。

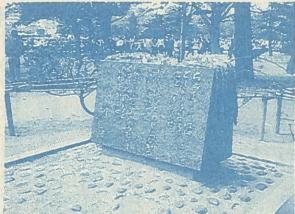
お風呂屋さんにゆくのも大変でした。お湯はひざ位迄しかなく、芋を洗う様な状態で不衛生此の上ない状態でした。そして必ず「じらみ」をもらつて帰つてくるのです。母が釜で肌着をたくのですが、なかなかたえる事がなく、やがて『発疹チフス』と云う恐しい伝染病が流行する様になり、アメリカからDDTがきてやつと日本人は『じらみ』から解放されました……。

私達の鉄筋住宅の窓から見える今宮中学校のプールが真ん前にあつたのですが、それは中学生達のプールではなく、駐留していたアメリカ兵のプールだったのです。どういうわ

けか、プールだけはアメリカ兵に占領されていて、そのプールの見張りの為に日本の警察官が毎晩二人宿直していたのです。でも弟達や近所の子供達は夜こつそり泳ぎにゆきました。第二人はそのプールで泳ぎを覚えました。やがてその中学校は高校に、弟はその高校に入学致しました。

戦争中はただただ勝利の為にと子供達にまで色んながまんを強いられ、天皇崇拜を強いられ、それを疑わざ来て死に追いやられ、すべてを失つても何んの保障もないまま今日までできています。戦争が起ざればどこの国も同じ事、今なおもっともつひどい状態の中にいる人達を思う時、世界平和を一日も早く実現させねばならないと願うのです。

国鉄も止つてしまつて、吹田駅より歩いて帰らなければなりませんでした。線路に沿つてみんな歩きました。やがて淀川の鉄橋までました。線路の真ん中に一メートル幅位の板が置いてあるだけ、それを渡らなければ梅田駅迄帰れないのですから渡るしかないのです。真ん中頃までがんばって来ましたが、ふと下を見つめました。前へ進む事も後



峠三吉詩碑

平和公園内（広島）

崎り  
長ぐ  
めぬ  
島碑  
島爆  
廣原

「ちらをかえせ、ははをかえせ……」の詩を刻んだ詩碑です。原水爆反対も「平和」ということすらも、はばかりられる占領下の時期に出た、この詩は、峠三吉の「平和」への思い、原水爆への怒りをひしひしと感じます。

り、そして二三日一この日は故郷尾の秋祭りなんです。午前三時二十五分、マニラ湾入口に於て米潜水艦の魚雷攻撃を受け、四つのスクリューの内三つがやられ、傾いたまま数時間持ち場を死守しました。以後三日間グラマンの機銃掃射を何度も浴びながら、カンパン十ヶで命をつないでいたんです。ようようマニラ港まで曳航されて応急修理を受けての帰途、今度は台風に三日間翻弄され、ボロボロになつて一二月二十日吳に帰港しました。

二十年一月、横須賀の海軍工機学校高等科に入學して四月頃、在学中の戦地帰りの下士官は特攻隊を志願せよとの命で、横須賀の第一特攻戦隊指令部付になつたんですが、特攻艇「蛟龍」に乗艇し、日夜訓練を繰り返している時、八月十五日を迎えた。しかしその後も「我が隊は八月二十六日敦賀に入港する米軍に攻撃をかける」と檄をとぼしたので、



自分達もその日こそ命日と覚悟しました。しかし二三日戦隊長は「軍命違反」の判を下され、自室で切腹、隊は解散しました。即帰国せよという訳で缶詰や米など物資を持てるだけ持ち、列車を乗りついで帰宅しました。家は焼けていましたが家族の無事を喜び、そして結婚、親となり、一国民として堅実に生活を営んできました。

伊場野ヒサ子

狭山南支部

## 命からがら玄界灘を

現在七十歳以上の方たちで戦争のきびしさ悲惨さを身をもって体験した者はかなりの数であると思う。私は終戦時は主人の任地の中国（撫順）にいた。終戦時は撫順から南西の方角に転勤した。終戦の朝、陛下のおことばをラジオを通し放送されたのを聞き、「ええ」となにがなんだか解からなく聞いた。

その日から十日間くらいの間は毎日のように北満からの開拓団であろう家族が、南へ南へと避難して、やっとここへ来たときには身内の誰かが病に倒れ、悲しい別れの亡きがらの野火が窓越しに遙か遠く見えていた。また、私たち避難している者のなかで、二十歳前後の若い女の中には頭を丸坊主にして顔にはすみを塗り地下室にひそんでいるのを見た。どの家も窓を閉め、入口にはガッチャリと鍵をかけ、息をひそめて過ごしていたが、ソ連兵が何度かトントンと社宅のドアを叩き、開ける開けると示す。開けないわけにはいかない。

## 南方の海に戦つて

久宝寺支部

荒尾 成敏

荒尾めぐみさんのお義父さん

今、自分は六九歳になります。青春真只中の二十代前半を軍隊で過した訳です。その頃を振り返り、お話しして見ましょう。

当時自分は近鉄の車輛整備工でした。一六年四月に徴兵検査を受け、甲種合格の通知には「トラキ」と読める判が押してあり、どうやら「海軍」を表示していたもののようにでした。

一七年一月に広島県の大竹海兵団に両親や親戚の祝いの膳や歓呼の声に送られて入営しました。「天皇陛下のために命を捧げよ」「お国のために働いてきます」と送り送られたものと、今も確信しています。そういう教育を頭の芯にたたき込まれていたんでしょうなあ。

吳では銃を扱いで行軍など新兵教育を六ヶ月修めました。楽しみは「營」という煙草を消灯後吸う事でした。確か四銭でしたな。その後三ヶ月を小松島航空隊へ整備兵（二等

兵）として、更に六ヶ月横須賀の海軍工機学校の無線電機科で学んだんです。階級は一等兵になっていました。再び吳の海軍団にもなり、陸上勤務三ヶ月後に重巡洋艦「青葉」一萬一千トンに上等兵として搭乗しました。

「青葉」はシンガポールを基地とする一六艦隊の旗艦でありました。「南方へ行って命を捨てるんだ。お国の勝利を信じて自分の本分を尽くすんだ！」何の迷いも恐れもありませんでしたなあ。

インド洋、シドニー沖を南下するにつれ、後甲板は熱くなつて弱りましたが、船酔いに苦しんだ記憶はありません。体質が海軍向けだったんでしょうなあ。毎日毎日海に囲まれ、動く艦での勤務は決して楽ではありませんでしたが、そこは若者、皆よく「誰か故郷を想わざる」を歌つたもんですヨ。時に芸人の慰問があつて、高峰三枝子の「南の花嫁さん」が印象に残っています。の人もなくなりましたなあ……

洋上の戦闘はすさまじいものです。海から空からの攻撃には何度も「もう駄目か」と観念したものでしたが、「青葉」は傷つきながらも不沈の旗艦としての重責を果してしまった。自分もその運に助けられて命拾いしたようなもんですよ。

一九年十月「青葉」は連合艦隊の所属にな



開けると天井にとどまっているの長身で室内に入り、手に銃をもち威嚇射撃を天井にむけてボンボンと脅す。「時計、時計、カメラ、カメラ」と身ぶり手ぶりで出せ、出せ、と言ふ。私は手をふり、「ない」「ない」と示す。その点中國兵はソ連兵より程度が高かったのであらう。礼儀正しかった。お鍋を貸してほしいと二、三度言ってきたことがある。すぐに見える道路の四つ辻で煮炊きをし、終わると鍋を洗い、お札をひって返しにきた。

やっと陛下のおことばの二、三日後、避難命令が出た。何處にいくのかさっぱり解らない。ただ婦女子のみ、宝石類は一切持ち帰つてはならぬ、手に持てるだけのものを持って、明日出発するとのことであった。しかし、当日には男子も引き上げができるようになり、私は生後一年足らずの乳児をおぶい、手をつながねばならない幼児と、自分の物は多少持てる子供（長女）と、主人は持てるだけの荷物を持って、行き先のわからぬ電車に乗つた。

中国はやっぱり広い。二日も三日も進めども進めども窓から見える景色は、ただ荒野ばかり。途中で列車が止まり、何事がおこったのかと案じていると中国の暴民がおそった由、列車一台がはずされ、又また、列車は同じような荒野を進む。東へ東へ、やっと「コ

ロトウ」（當時の中国の言い方、中国の東部に当たる）に着いた。

コロトウから、コロトウ埠頭に行くのである。コロトウ埠頭まではトラックである。屋根のない荷物運びの車で、床には荒筵が敷いてある。牛馬並である。ここから荒海で有名な玄界灘を通り、九州の佐世保港に着くのである。

ただでさえ船酔いのひどい私、敗戦者の私たちは荷物並のあつかいである。船底はゆれること、ゆれること。飲まず食わずの二日、三日間であった。やっと佐世保港に着いた。みな無事に内地に帰れた喜びの顔である。伝染病の保菌者の検査のため、一日上陸は延ばされた。

下関から大阪まで列車に乗つた。乗つてきた内地からの乗客たちは、引揚者同様の身なりである。戦災にあったのであろう。押して



崎嶺・島原・長崎  
爆弾碑

## 核廃絶人類不戦の碑

松山公園内（長崎）

太平洋戦争開戦（一九四一年）四十周年の十二月八日に内外の淨財を集めて建立。七万人余りの日本人、数千人の朝鮮人、中国人労働者や留学生、連合軍捕虜が犠牲になりました。

押して乗れるだけ乗る。まったくすし詰めとは、このことである。ご飯になると乗客はみんな得体の知れない食べ物をかじつていられる。窓から外を見ると、見覚えのある六甲山麓は見るも無惨なものである。

乗客はルンペン同様、うすよごれて変な恰好の者ばかりである。お風呂などもっての外、何日も入っていないのであらうと察せられる。やみ米や、やみ砂糖等を何處かで手に入れ、汽車で運んでいるのであろう。見つかれば罰せられる。それを承知でやっている。なんと敗戦とは悲しいものであるか、無惨なものであるかを身にしみて感じた。

命をさぐる文界団

## 銃後の生活

貝塚南支部

南 桂子さんのお母さん

其れも長い時間行列をしてもらいに行きました。

「ほしがりません、勝つまでは」、標語でした。ひもじい、苦しい時代でした。

戦争もますますはげしくなり、乙種合格の人も、甲種合格と一緒に召集されました。その年の三月七日、大阪築港から外地へ行かれました。これが最後になるかも知れない別れだと思いました。船が水平線の彼方まで見えなくなるまで、多くの人が見送っていました。銃後の守りがかたければ、戦地にいった人々も安心して国家のために戦える、とよくいわれました。

学校、町会、婦人会の人達で慰問袋を縫い、皇軍勇士様と書いてよく送りました。

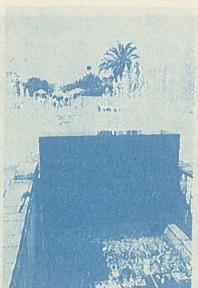
学校の卒業式の時に、女性で有りながら國家の為に、白衣の天使になられた人々は、大変ほめられました。私はとてもうらやましかったです。

私の所には、度々挺身隊のよび出しが来ました。年を取った両親が有り兄も出征中の事なので行きませんでした。

昭和二十年八月十五日朝、町内の人々も何も知りませんでしたので、今日も重大放送があるとの事、一億一心で火の玉と成って敵に戦うのだといわれました。

十二時になりラジオの有る家へ集合しました





広島・長崎  
原爆碑めぐり  
平和の泉  
平和公園内(長崎)

「平和の泉」は、水を求めて亡くなつた人々を慰めるために「核兵器廃絶の日」まで絶えることなく噴出させようと創られたものです。この碑に刻まれた詩は、山口幸子さん(当時九才)の作文から一部引用されています。低い水はハトを、高い噴水はツルの舞いのごとく噴出する。

「日記昭和二十年」

88888888

この日記は、春田丘支部の阿武利世子さんが昭和二十年の一月一日より一二月三一日まで、一日も欠かさず、付けられたものをお借りし食糧難の部分を抜粋させていただきます。あの日の兵庫県を知る貴重な資料として残されています。

この日記は、春田丘支部の阿武利世子さん  
御厚意により、高女時代の恩師 井上勇さん  
が昭和二十年の一月一日より二月三一日  
まで、一日も欠かさず、付けられたものをお  
届けし食糧難の部分を抜粋させていただきま  
した。あの日の兵庫県を知る貴重な資料とし  
て残されています。

起床七時、決戦服装で登校、拳式。昼昨日配給のトウフ、大根をたき、これをサカナにして飲む。カン詰を一つあけようかと思ったが、赤穂の子らあての賀状のはしに、こんどみやげに持ち帰える旨書き添えていたのでやめる。

越後一田

二月一日（木）  
一月も終った。自炊生活も満十カ月。まことに早いもの、午前二回工場巡視、本日幸いに警報が発令されぬ。昼食後、作業衣のほごろびの修理中、生徒が見かねたか、ひつたくる

昨日は、名古屋にB29四百、九州に艦載機七百進攻、鈴木首相は地方長官会議で「勝利は民の信にあり」と訓示した。五時起床、タケノコ、菜の葉のグアスイをたき、一杯食う。

昨日 神戸へ

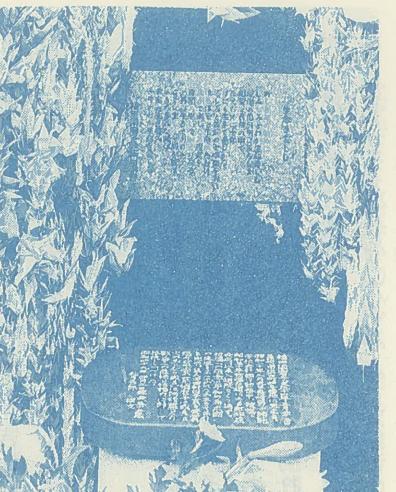
戸沿線は国道を西へ人と物との巨流、西灘の実家の安否が気遣われる。(注、市民三千八百

六月二二日（金）午前零時空襲発令直ちに飛び起きて服装を

解除。また寝なおす。七時にまた発令。リュックを背負うて理研へ急ぐ。市中はもののもの

空襲におびゆる子らの手を掴み 髪ふり

生徒を帰宅させて帰校、やがて八時五分、空襲となつた。大編隊来襲、ラジオは刻々と



# 広島・壇崎 廻縄碑めぐり

福田須磨子  
詩碑

松山公園内（長崎）

福田須磨子（一九三二—一九七四）さんは、二十三歳で被爆し、入退院を繰り返しながら、文学活動で反核を訴えつけました。代表作には、生活記録をつづった『われなお生きてあり』があり、五十二歳で死没。命日には、この碑の前で偲ぶ集いが開かれています。





久留美子

平和を祈る子の像  
松山公園内（長崎）

平和を祈る子の像

松公園内（長崎）

ただすに、予期したごくすべて食糧と交換したという。自分のものはもとより、わたしの式服は米六升と麦七升、絹子のものまで米一升五合など涙と共に物語るのであった。

一〇月六日（土）

政治犯人三千名即時釈放の手続きをすると、司法省発表。午後、幣原喜重郎氏に大命降下。第一候補者の吉田茂氏は固持して受けず、そのまま留任の由。新首相は「食、衣、住」に重点をおくると声明。

昨夜、釣ったセイゴを弁当箱に入れておいたが、ネズミに完全にやられた。残念至極。朝は大豆粉、コイモ、ジャガイモを少しづつ混ぜて汁をつくる。これで赤穂から持ち帰ったみやげを全部平げた。だがとにかく、端境期を切り抜けることができた。この冬は一人につき炭二俵が精々であるとは情けない。輸送難が大きいにたたつて、いるという。

米麦七日分の配給があったが、本日も昼食をとらず。赤穂から速達で、物価高で苦しい旨を述べ、例により金を送れである。これは当方の生活は成り立たぬ。ヤミに手を出せばきりのないこと。しかし、食い盛りの四人の子を抱えているのだから無理もない。本日の新聞にも、家族四人の食費、月六百円、ヤミ買入するもなお力ュ生活。米一升六十円、サツマイモ一貫刃三十円など。大阪のさる家の家計を記している。かの孔子は菜つ葉やコウリヤンめしのような粗食をし、肱を曲げてこれを枕とする生活をしていても楽しみはあるものだ、と言われたが、孔子さんには飢えに泣く子どもはなかったものと見える。

ともあれこどものない者は幸いである。産児制限論が活発に論議されているのもは当然である。連日の各新聞は、食糧危機の記事を満載。大阪の鶴橋、神戸の三宮のヤミ市風景の写真を掲載している。果物、にぎり、団子、

まんじゅう、しるこ、ローソクなど、品物はにぎやかだが、すべて十円単位の高値だと。栄養失調者が続出し、医師も手を焼いている由。

まんじゅう、しるこ、ローソクなど、品物はにぎやかだが、すべて十円単位の高値だと。栄養失調者が続出し、医師も手を焼いている由。

一〇月三〇日（火）

信州の長野山中につくられた延々二里半（十キロ）におよぶ、地下の大作戦室の内容が発表され、驚いた。豪壮な洞穴都市、金泥のふすま、床間二十畳の換気室設計、これがため、五日間に三部落が強制的に立ちのかされた由、昨年の春に計画され、この春完成したという。この地は今を去る四百年前、武田信玄が海津城を築いた天下の要害地。大本営をここに移す腹だったようだが、天皇は移られることを拒否、あくまで帝都に残ると言われたそうだ。

一一月一三日（火）

対日空襲の全貌を米側から、昨日発表された。焼夷弾投下十万個、都市工業地の四十二%を破壊したと。中国は聖上、東久邇宮を戦犯として指名するという。しかし、おそらく米国はこれを抑えるであろう。

連日一食または二食の生活。昨夜はついに徹夜したので、今日午後一年生の授業はまことにつらかった。途中、自習を命じ準備室の机に伏して体を休めようとしたが、娘どもはがやがやと騒ぐので、叱ってまた授業を継続、



# 広島・長崎 原爆碑めぐり

慈山寺跡

平和公園内（広島）

一瞬にして、一〇〇坪の境内地のすべての建物と住職ら全員が蒸発してしまい、慈仙寺の墓地は、強烈な爆風で、めちゃめちゃに破壊されました。いま公園内にある倒れた墓石が原爆の力を語りついでいます。

に帰宅したのも、向の日は大半が無いので、欠食のまま午後の授業を受けると、こもごも語る。

聞きとれない。だが、大意を拝承し、感涙にむせる。

八月一九日（日）

七時起床。だいぶ気持も落ちついた。昨日配給があるはずの主食がこない、朝食抜きと覚悟する。午後三時ごろ、ソウメン五タバ配給、さっそく二タバを校庭の周囲の雑草すべリヒュを混ぜてたく。駐在の旧中部軍の連中は、白米を惜しげもなくたいている。

九月八日（土）

朝五時半運河に行きセイゴ五四つる。三年生登校。生徒と共に校舎の南側の大掃除をする。朝メシ抜き。正午豆を少しいり、懷中にて車中でかじる。

夕方、カエル取りにあぜ道を歩いた。今朝釣場で常連から、寒くなるとつれなくなると聞いたからである、棒で多数打ち殺した。わ

ぬ。服は泥まみれ、また菜の葉の代用にギシギシをつみ胴乱におし込む。  
『夕闇にせまれるあぜをさよひて　冬の  
糧にとかわづたたきぬ』  
夜力エル解体五十三匹道で拾うたボロガサ  
の竹骨をクシとして刺す。これを天日で乾か  
そう。だが、生徒の目に付かぬ所がよい、三  
階の屋上の隅がよからう。

九月二一日（金）

起きるや朝がゆをたく、昼食と二回に分割  
するつもりだったが、結局一回で平げる。昼  
抜き。午後、職員の畠の割当てあり、わたし  
は、二うねである、播種は遅いが、大根、菜  
つ葉をまく。

釣からの帰途、草むらの中に小麦粉らしき  
もの一俵隠してあるのを発見。おそらく駅の  
仲仕の仕業であろうか。

夜イモ、ソウメン、トウモロコシ一合。早  
いが赤穂帰省のみやげ物など整理する。いず  
れもヤミで求めたものではない。  
カン詰三個、油七勺、ミソ百匁、フクラシ  
粉一袋、セイゴ八匹。  
文房具（絢子と竜介）。運動靴（礼子）。混  
織シャツ（駿介）。金三百五円。出発当日まで  
に一匹でも多くみやげにしようと夜釣りに出  
かけ、零時半まで頑張って、やっと七匹あげ  
る。

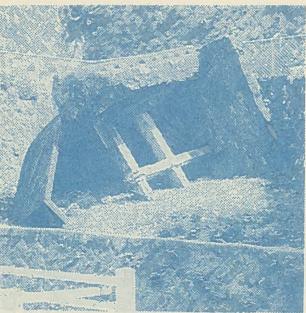
九月二九日（土）

五時起床。自宅の裏畠はよく作っている。  
前の国民学校の運動場も、通路を残してみな  
農園化。早朝、絢子、竜介、駿介に案内され  
てイモ畠を見に行く。笠根のはびこる荒地を  
知人より借用し、妻とともにども。何日もかか  
つて掘り起こした由。子らのはき物を見るに、

聞きとれない。だが、大意を拝承し、感涙に  
むせぶ。

ぬ。服は泥まみれ、また菜つ葉の代用にギシギシをつみ胴胱におし込む。  
『夕闇にせまれるあぜをさまよいて　冬の  
量にとかわづたたきぬ』

夜イモ、ソウメン、トウモロコシ一合。早  
いが赤穂帰省のみやげ物など整理する。いず  
れもヤミで求めたものではない。



島爆  
広原  
長め  
ぐり

### 浦上天主堂・鐘楼ドーム

爆心地より北東へ0・55km (長崎)

この附近の爆風は、秒速二五〇メートルと推定され、その強烈な爆風は、重さ三〇〇トンと思われるドームを三五メートル離れた位置まで、吹きとぼし原爆の一威力どあの日の惨状を偲ることができます。

四十数年の歳月が流れ人々の口からも余り聞く事もなくなり、孫達に話しても不思議そうに問い合わせられて！ どうしたらわかる様に説明したらいよいのか。とまとってしまふ此の頃です。でも、私には忘れる事の出来ない長くて、つらく悲しい苦しい歳月でした。

其の頃、私は会社の寮で沢山の友と楽しい明るい青春時代を過していました。今の娘さんと同じように、仕事の後、お花、お茶、色々な習い事を一生懸命勉強していました。樂し

い印象に残っているのは、義兄が出征する時でした。家の前では隣組の人達がバンザイバンザイと言っている時、姉が家の中の暗

### 日笠山ひさ

光陽支部

### つらく悲しい歳月

い嬉しい未来の夢を見ながら！

ところが戦争と言う恐ろしい時代に入つて行つたのです。それからは、今まで自由に手に入つていた物が買えなくなり、着る物食べる物がだんだん私達の目の前から消えて行きました。生活も次第に苦しくなり、人々の目までが悲しい暗い顔に変わって行き、仲良しだった友まで、ばらばらに別れなければならなくなりました。と言うのも軍需工場の男性が、次々と召集され人員不足の為、兵器を造る事が出来なくなり、やむなく転出されたのです。その為私達の会社も少しづつ軍需の方へと変つて行く様になり、色々な面で苦しくなりました。そのうち兄達も次々と召集されました。

一番印象に残っているのは、義兄が出征する時でした。家の前では隣組の人達がバンザイバンザイと言っている時、姉が家の中の暗

い所で一人淋しそうに涙をかくしていた姿を今でも忘れる事の出来ない悲しい思い出です。戦争も益々大きくなり、私達の回りにも男性の姿が少なくなり、お年よりや子供が目立つ様になり、生活もきびしくなりました。

仕事の後も、竹ヤリの練習や消防訓練で好きな習い事も出来なくなり、戦地も内地も戦争一色となりました。

その後、まさかと思っていた出来事が次々私達の耳にも入つて来る様になり、遂に敵機が飛んで来る様になり、毎日毎晩飛行機が東京大阪と空襲されたとのニュースがデマと共に大きく私達をおびやかしました。

私達の田舎まで来ないと信じていたのに、遂に、焼夷弾が投下されました。最初は逃げていましたが、遂に寮も火事になつた時は、恐ろしさも忘れて寮を守る事が先決でした。その後の合言葉「欲しがりません勝つまでは」この言葉を信じて、大人も子供も全員が、苦しみも悲しみも、辛棒して戦つたのです。それなのに、八月六日世界で初めてと言う、原子爆弾が広島に投下されたのです。つづいて、長崎にまで投下されたのです。その後、私達はどうなるんだろと言う不安で一杯でした。そのうち、アメリカ兵が日本へ上陸して、女性はどうされるかわからないから、山奥へ逃げた方が良いと言う様なデマが広が

鐘が鳴つてはっとする。相手はまだ子供である。身体検査の統計期限が切れ、大急ぎで調整。夜はまた二時ごろまで計算の仕事。混食米一台をカユだきとする。半分は明日にしようと、いったん残したが結局平げた。

本日の紙上に、定収入の生活苦をマ元帥に訴え投書した者があると報じている。また一日五分の三ポンドの米ではやりきれません。願わくば、一ポンドの配給を懇願します。されば私は一生閣下のご恩は忘れません」というものもあるそうだ。カユ腹で学童の居眠り続出。欠席者も多く、午後の授業は不可能だという学校も多いそうだ。

一二月九日 (日)

脛、ミカンの特配あり。久し振りにたくさん食べた。夜一台三勺程カユだきとし、ミカンの皮もこれに放り込む。赤穂へ手紙とともに二百円送金。これでは実際やりきれない。わたしの一ヶ月の生活費は四十三円。おそらく今日のサラリーマンとしては最低ではあるまい。

一二月一三日 (木)

本日は案外暖い。寝床に入つたがどうも体がかゆい。シャツを着かえる。消毒の要あり。メリケン粉三日分一升の配給があった。田口先生はヤミ市でクジラ肉を百匁九円で求めたという。だが、わたしにはそのような金もな

い。

本市の十二月十六日から十二月三十一日までの主食が発表された。内地米(七日)精白麦(六日)小麦粉(三日)モチ米一人四合一勺。「太って元気なのはヤミ屋の子、サラリーマンの子あわれ」と紙上に投書あり。去る八日、松江市で約千人の市民が食物配給の不公平を鳴らして、市役所に押しかけ示威運動をした由。困窮者は優先的に配給すると、市長は約束したそうだが、困っている者はほとんど皆である。

一二月三一日 (月)

午前二時起床。割烹室でまずカユをかき込み四時前、阪神電車で三宮へ馳せつける。とてもダメかと半ばあきらめていたが、幸いしてうまく成功、有年駅までの切符を入手し得た。新聞を求め、しばらく構内で読む。声欄に「教育者の待遇を改善せよ」「教権の確立」「教育費をふやせ」など曰につく。

東京の銀座にダンスホール二軒。美容院は四十軒もあるが、ほとんどガラあき同然だとう。食うことで血眼なせいだろう。美容院へ通う者がいることのほうが不思議である。いま一度帰校して、生物室および物象室の清掃をする。みそ百刃の配給あり。十時、城内局で積立金五百六円を引き出す。カゼ気味かセキができる用心せねばならぬ。いっそ、赤穂

へ帰ろうかと思つたが、かつて新年の式に欠席したことがないので、もう一日ねばることにする。

粟井先生が最後の日直。職員室の南側で巻タバコ作り。カゼ薬を用心のため飲む。夜となり、停電。ああ、昭和二十年もついに終った。多事、多難の年であった。思えばわたしは四十二歳の厄年である。

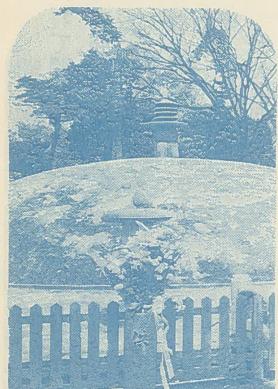
わたしの家に、平素わたしが特に私淑している頼山陽の一軸がある。もとより偽筆であろうが、久しい以前から本物と思うて大切に愛蔵している。竹の図に左の讚がしてある。

百折不屈不撓剛健君子也 裏

(百折屈せず、撓せず、剛にして健なる者は君子なり)

わたしも、竹のように生きたい。新しい年を迎えて、心機一転して頑張ろう。インフレはますます甚しくなる。ヤミ市の現状、まさに困ったものである。

(完)



島原長崎・碑めぐら

供養塔  
平和公園内(広島)

日本人はみんななぜいたくになり、食物にも不服ばかり、私は孫にも言います。食物を粗末にしてはいけない。食べたくても食べる物が無く、栄養失調で死ぬ子供が、たくさんいざながりました。戻りたての連絡で、従業員三千人余りが集まっていると、静かで聞いた事のない声がひびいてきました。初めて聞く天皇陛下の声でした。淋しく悲しくそれでいて神々しい声でした。聞いているうちだんだん戦争に負けたという事がわかり、みんなでオーオー泣きながら聞きました。そして終戦、忘れる事の出来ない悲しい日でした。今までの苦しい生活は、何の為だったんだろうと話したものです。

その後が大変、主食はサツマイモ、豆が中心になりました。おべんとうもイモを持って行つたものです。私達は、工場食だったのでも食べる事には心配はありませんでした。でも色々な物がたくさん入ったぞうすいが主でした。でも、私達は食べられるだけ、幸せでした。お金はあっても食べる物がなく、栄養失調で死んで行く人を目の前で見てきました。

今、テレビニュースでベトナム、フィリピンの人達を見る時、日本もあんな時代があったのに、今は、ひとごとの様に思つて見てくる事が恐ろしいような気がします。

日本人はみんななぜいたくになり、食物にも不服ばかり、私は孫にも言います。食物を粗末にしてはいけない。食べたくても食べる物が無く、栄養失調で死ぬ子供が、たくさんいざながりました。戻りたての連絡で、従業員三千人余りが集まっていると、静かで聞いた事のない声がひびいてきました。初めて聞く天皇陛下の声でした。淋しく悲しくそれでいて神々しい声でした。聞いているうちだんだん戦争に負けたという事がわかり、みんなでオーオー泣きながら聞きました。そして終戦、忘れる事の出来ない悲しい日でした。今までの苦しい生活は、何の為だったんだろうと話したものです。

その後が大変、主食はサツマイモ、豆が中心になりました。おべんとうもイモを持って行つたものです。私達は、工場食だったのでも食べる事には心配はありませんでした。でも色々な物がたくさん入ったぞうすいが主でした。でも、私達は食べられるだけ、幸せでした。お金はあっても食べる物がなく、栄養失調で死んで行く人を目の前で見てきました。

今、テレビニュースでベトナム、フィリピンの人達を見る時、日本もあんな時代があったのに、今は、ひとごとの様に思つて見てくる事が恐ろしいような気がします。



## 許せない無謀な戦争

河内長野南支部  
眞野マサ子  
二村光永さんのお母さん

大正十二年生れの私の青春時代は、戦前戦後を通して毎日が生活の戦いで、前途に希望もなければ夢もない青春時代を過ごしました。

あの忌まわしい大東亜戦争で三回も家を焼きはらわれて逃げまどい、今日は生きられても明日は死ぬかも知れない恐怖と絶望の中で、何の罪もない人間がどうしてこんな悲惨な目にあわねばならないのかと、深い疑問をもちはじめたのは終戦後のことでした。

戦争のさなかには必ず日本は大勝利するものと信じていたのですが、夜毎に大編隊を組

んで、和歌山方面から近畿上空に潜入する敵機の数と焼夷弾の投下に、まるで地獄絵を見るような情景が毎夜くり返されていました。工業地帯に落す一トン級の爆弾や焼夷弾の直撃を受けて、バタバタ死ぬ者、家を焼き払われる者、逃げ場のない老人、子供、こんな戦争をして果して勝つのだろか、全く国民は日本軍隊の戦略に惑わされていたのです。

一億総火の玉とか、勝つまでは欲しがりませんと、戦争を美化し、鼓舞しておき乍ら、世界の強大国を相手に、日本軍隊は勝目ない戦争をつづけ、とうとう泥沼の中にはまりこんでいたのです。

大本営発表は、毎日毎日、勝利の大戦果をニュースに流していました。家も、財産も、肉親さえも失った市民は、焼跡からふき出す水道の水を口にするだけで、暗い防空壕の中でやつと命をつないでいました。

昭和二十年五月、ドイツ降伏が欧州にさけばると、本土空襲は一段と激しくなり、毎日茶目茶に破壊された都市のあちこちに、食糧もなく住居もなく肉親ともはなればなれになった市民が、地下道の中で着のみ着のままの姿で寝ていた様は、戦後、しばらく続いました。

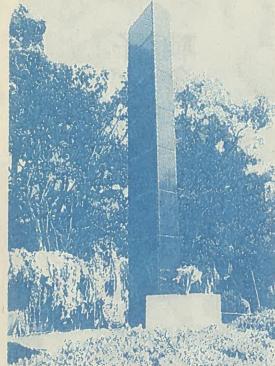
これから日本の日本は一体どうなるのだろうか。夜の大空襲からは解放され、爆弾が落ちる心配もなくなりましたが、飢えと寒さで死ぬ者は数知れず、敗戦のどさくさにまぎ

夜警報がなって警戒警報から空襲警報への連続で、正に神経戦になつてきました。四月八日をもつて、第二次大戦の終末を告げたと情報が入つているにもかかわらず、日本軍はこの時、沖縄での決戦の火ぶたを切つていたのです。

特攻隊があるから、世界を驚かす大戦果を上げているとも言つていました。物量なくとも特攻魂があれば必ず大勝利すると、軍部の幹部連中の豪語にだまされていました。広島と長崎に原爆が投下され、多数の命が一瞬の間に失われて、昭和二十年八月やつと終戦となりました。

今にして思えば、勝目のない戦争と判つていても、お国の為にと称して、若い命をむぎ戦火の中に捨てていった日本帝国の参謀司令部は、狂氣と言わざしてなんと言うべきでしょうか。

これからの日本は一体どうなるのだろうか。夜の大空襲からは解放され、爆弾が落ちる心配もなくなりましたが、飢えと寒さで死ぬ者は数知れず、敗戦のどさくさにまぎ



## 広島・長崎原爆碑めぐり

にB29の編隊が港、陸上の基地に爆弾投下がひんぱんの様。それでも前線輸送は続きました。ついに最前線のブイン（ブーゲンビル）へは航行することは困難な状態となつた。それから数日後、ブーゲンビルへ向わねばならない。早朝ラバウルを出航して間もなくB29の編隊が飛来して爆弾投下。それでも船で来て、バラバラバラ。すさまじい音を立てる機銃操射が始つた。同じく見張りをしていな船長が無言のままに倒れ、銃弾が胸を貫通していった。やがて敵機は去つて静かになつた。船長の遺体を船室に運び、安置して線香を上げて冥福を祈りました。

その後も物資の輸送は続けられる。やつと車の事で又ブーゲンビルに着き、荷揚を終え、船長の遺体を遺骨にして再び船中に安置しました。明日は我が身とも知れぬ、残酷な戦闘に嘆く。病院船まで襲撃するとの矢先に、ようよう病院船が入港して来て、やつとの事で船

原爆落下中心碑 長崎市内松山公園内（長崎）

長崎市内の松山公園内に建てられている碑。一九四五年八月九日午前十一時二〇分、この碑の上空五〇〇メートルあたりで炸裂した原爆（ファット・マン）は死者七万三、八四人、被害者七万四、九〇九人と、一キロメートル圏内の家庭のほとんどを原型をとどめないほど破壊しました。

# 原爆落下中心碑 長崎市内松山公園内（長崎）

○名の内、女性一人だけが上陸していた。  
もうそれからは輸送も不可能になり、ラバ  
ウルの地に釘付けとなつた。空爆と艦砲射撃  
が一段と激しくなり、日本軍の頑丈な地下防  
空壕の中での生活をしいられた。航海中の船  
団の中で本船の乗組員だけが(船長死亡)の他  
生き残つた。幸いとも思えず、多くの犠牲者  
の冥福を祈るばかり。馬鹿な戦争だと叫びた  
い。

私も戦争という行動に夢中で生死を忘れ軍  
属として行動した事は誇りに思いました(当  
時)。昭和二十年八月長い戦争が終り、無念の  
限りでした。翌年の昭和二十一年二月浦賀に  
上陸、残務整理の為に残り、横浜の叔父宅へ  
立ち寄り「お前は田舎には戦死の通知が届い  
ている」と聞き、何か胸を打つものが蘇つた。  
戦争は人間の思想を変える大変な恐ろしい事  
である。戦争をなくし、平和を造る事の願いでもあろ  
う。

長崎市内の松山公園内に建てられている碑。一九四五年八月九日午前十一時二〇分、この碑の上空五〇〇メートルあたりで爆裂した原爆(ファット・マン)は死者七万三、八四人、被害者七万四、九〇九人と、一キロメートル圏内の家屋のほとんどを原型をどめないほど破壊しました。

長の遺骨と遺品を託すことが出来ました。今度はパラオに向けて転進の指令が来た。もう当時は出航した船団は帰ることはないとの開いていた。

明日の命を覚悟しながら、愈々又ラバウルを出航する日が決まった。船団の打ち合せにより四隻となつた。日を追うにつれ船の数少なくなつてゆく。護衛艦を先に対岸を一回の距離に保ちながら航海する。夜九時を過ぎた頃ラバウルを出航。まもなく敵の偵察機の音が聞え、不吉な予感を覚え、エンジンを停止して様子を伺いながら異様な雰囲気に包まれている。沖あいの方からドンドンドン激しい音がする。ああ艦砲射撃だと直感。暫くはいた後、敵は去つた。すると本船も破片を受けて船体が揺れて来る。船倉に海水の流れ込みを止め、全員を集めて座礁することに決め成功した。夜間を徹して食糧全部陸揚した。その時すでに二隻撃沈されていた。その船に乗り合せていた本土からの慰問団の一一行き

現在の私は二才といふ長命に至つてゐる。そして今の平和の尊さを歴みしめつつ。

○名の内、女性一人だけが上陸していた。  
もうそれからは輸送も不可能になり、ラバ  
ウルの地に釘付けとなつた。空爆と艦砲射撃  
空壕の中での生活をしいられた。航海中の船  
団の中で本船の乗組員だけが(船長死亡の他)  
生き残つた。幸いとも思えず、多くの犠牲者  
の冥福を祈るばかり。馬鹿な戦争だと叫びた  
い。

私も戦争という行動に夢中で生死を忘れ軍  
属として行動した事は誇りに思いました(当  
時)。昭和二十年八月長い戦争が終り、無念の  
限りでした。翌年の昭和二十一年二月浦賀に  
上陸、残務整理の為に残り、横浜の叔父宅へ  
立ち寄り「お前は田舎には戦死の通知が届い  
ている」と聞き、何か胸を打つものが蘇つた。  
戦争は人間の思想を変える大変な恐ろしい事  
である。戦争をなくし、平和を造る事の願い  
は私一人ではなく、世界人類の願いでもあろ



國敗れて山河ありの言葉はあつても、なんとか助かつた人命を二度と再び戦争のために失なつてはならない。

どんな理由があるにせよ、全人類は世界各国に無謀な戦争を仕掛けないでほしい。この膨大な犠牲を払つて得た、尊い今日の平和を大切に守り通したいと思つております。

これからはますます私のような戦争体験者は、少くなる世代に變つてきますが、一人一人が命を大切にする事は、平和な時代であつても変らず、いつも健康で病気をせず、あたえられた人生をたのしく意義あるものにしてほしいと切に祈つております。

度に潜水艦や機雷などの危険を恐れながら、昭和十八年四月還らぬ船団と噂にされつゝある。本船はラバウル第八根拠地隊に配属され、漁船二十一隻と本船を含め二七隻、護衛艦、先導に佐世保を出航、途中、牛深、山川、那覇、高雄、と燃料の補充等もあって荷揚、積荷と寄港する。出航の日も上司令部の命令に従う。それから南下してマニラ、セブ島、ラオカオを経て目的の基地ラバウルに到着。約ヶ月が過ぎ、着くや船団の漁船とも別れを告げ、漁船は折返し日本本土へと向う。途中、航海の危険もあって何隻無事にたどり着いたか。であろうか。

る。当時は未だ前線基地とは思えない静けさでした。時折り偵察機が飛来したが各基地から<sup>ア</sup>のサーチライトを浴びて去つて行く姿を見<sup>ア</sup>て案外に感じていました。段々日時を追う毎

れて閑食糧物資で一儲けする輩も出没して、  
退廃の一途をたどるばかりでした。  
國敗れて山河ありの言葉はあつても、なん  
とか助かった人命を二度と再び戦争のために  
失なつてはならない。

## 馬鹿な戦争と呼びたい

也田

富森 そのえさんのお父さん 池田 三太郎



子ども心にも  
戦争はいやだつた

狹山西支部

篠水ミヨ子

今年も暑い夏が来ました。私は四十五年前の八月十五日、あの終戦を告げられた天皇陛下の言葉を今でもはっきりと思い出します。その時私は十五歳でした。戦争に負けた事よりも、これでの恐ろしい空襲からのがれられる方がどれだけ嬉しかったかおぼえています。

私が小学四年生の十二月です。太平洋戦争が始まりました。しばらくは、何事もなかったのですが、勝っていたからでしょう。その内、時々は警戒警報が出る様になり、夜など電気に黒い布をかぶせて寝ました。学校に行つても勉強など落着いて出来ず、警報が鳴れば机の下にもぐつたりしていました。

途中下校にも何回もなり、ある時は帰る途中、敵の飛行機が近くまで飛んで来たので、道路に臥せたり、土手の草の中にかくれてじつとしていた事もあります。

大人の人達で日本は神国だから必ず戦争に

勝つと話していたのをよく聞きました。その内戦争もほげしくなり、私の家の近くに兵器を作る工場があったので時々爆弾が落とされる様になりました。大きな音と夜空に赤々と燃え上がる火を見て恐ろしさに震えていたものです。それでも次々と兵隊さんが出征して行くのでお母さん達が白いエプロン姿で日の丸の旗を持って駅まで見送りに行ってました。

時には隣組で竹槍や水はごひの練習を母達はしていました。皆んな一生懸命だった様に思い出します。私達も学校に勉強に行くより奉仕に行く事が多くなり、工場の部品の組立や農家の手伝いやらに行きました。ある日、田植の手伝い中飛行機が二機飛んで来ました。日の丸が見えたので安心していました。突然別の所から一機飛んで来たのです。それがアメリカの飛行機でした。空中戦が始まると私達はびっくりして川の中に首までつかり、恐ろしさに死ぬかと思いました。そして日本の飛行機が落され田の中にめり込みました。兵隊さんも二人共死にました。敵機はゆうゆうと引き上げて行きました。

私の兄の友達も戦死して帰りました。悲しかったおはさんの姿が今も目に浮かびます。本当は戦争はいやだと子供心に思つたものです。私達はあの恐ろしさを二度とくり返

してはいけないと思います。体験者が語り、私達の運動で核発絶を訴えて世界の平和を考えたいと思います。

